

## 中国雲南省西双版纳ダイ族の住空間構造の変容と継承

主査 富樫 穎\*<sup>1</sup>  
委員 上田 博之\*<sup>2</sup> 米原 慶子\*<sup>3</sup>  
〃 竹原 義二\*<sup>4</sup> 篠原 亨\*<sup>5</sup>  
〃 山崎 寿一\*<sup>6</sup>

キーワード：1) 中国雲南省, 2) シーサンパンナ, 3) ダイ・ルー族, 4) 伝統的住居, 5) 住空間構造, 6) 空間序列, 7) 領域構成, 8) 空間軸, 9) 住居語意, 10) 家の神

### 1. はじめに

ダイ族は、中国雲南省南部からベトナム・ラオス・ミャンマー・タイ・インドの北部に、居住している。

中国では、ダイ族を漢語で「傣族」と表記し、「傣」を「タイ」と発音している。そのため、日本ではダイ族をタイ族と表現する研究者が少なくない。しかし、ダイ族は自らを「ダイ」と発音しており、雲南省民族研究所や雲南民族学院の研究者は「傣」を「ダイ」と発音している。また、雲南工業大学朱良文教授の英文の著書の題名も「The Dai」である。したがって、本研究では、「タイ族」ではなく「ダイ族」と表記する。

ダイ族はいくつかの支族に分かれる。雲南省民族研究所の高立士副研究員によると、主要な支族は次の通りである。この他にも数種類の支族が存在するようだが、まだ明確になっていない。

①ダイ・ルー族：西双版纳（シーサンパンナ）地域に住み、モンラーが発祥の地と言われている。人口約30万人、一部はラオス北部にも住む。水田地域に住んでいるので、漢族は彼らを「水傣族」と呼び、日本でも「水タイ族」と紹介されている。

②ダイ・ヌー族：ヌーは「上」の意味で、怒江の上流地域、すなわちドンフォー地域に住む。人口約30万人。漢族は彼らを「水から離れて暮らしている」という意味で「旱傣族」と呼び、日本にもそのように紹介されたが、実際には水田地域に住んでおり、この呼称は誤った呼称である。また、「漢語が話せる」という意味で「漢傣族」とも呼ばれているが、この呼称も適切でない。なお、「旱」と「漢」は漢語で同じ発音である。

③ダイ・ヤー族：紅河の上流に住む。人口約10万人。その服装から、漢族は彼らを「花腰傣族」と呼び、日本にもそのように紹介されているが、ダイ・ヤーのほとんどが「花腰傣族」ではあるが、すべてではない。

④ダイ・グェー族：紅河の中流に住む。人口約10万人。服装はツァン族と似ており、ツァン族の支族の可能性はある。

⑤ダイ・ボン族：ミャンマーの近くに住む。人口約1万人。ダイ・ボンの大部分はミャンマー北部に住む。

⑥ダイ・クン族：ミャンマーの近くに住む。人口数千人。ダイ・クンの大部分はミャンマー北部に住む。

⑦ダイ・カウ族：人口約1万人。カウは「白」の意味で、ベトナムの白タイ族と同じ。大部分はベトナム北部に住み、一部はラオス・タイ北部にも住む。

⑧ダイ・ラム族：人口約1万人。ラムは「黒」の意味で、ベトナムの黒タイ族と同じ。大部分はベトナム北部に住み、一部はラオス・タイ北部にも住む。

⑨ダイ・リアン族：人口約1千人。リアンは「太陽が昇る」という意味で、ベトナムの赤タイ族と同じ。大部分はベトナム北部に住み、一部はラオス・タイ北部にも住む。

上記支族のうち、①～④は言語が基本的に同じで、部分的に会話が可能である。①と②は文字を持ち、一部異なるが、大部分の文字が同じである。③と④は文字を持たない。①～④と⑤～⑨は共通の単語があるが、会話は成立しない。

本研究で取り上げるダイ族は、中国雲南省西双版纳（シーサンパンナ）地域のダイ・ルー族である。ダイ・ルー族は水田稲作を主とする農耕民族である。

以下、本研究ではダイ・ルー族を単にダイ族と呼ぶことにする。

### 2. 研究の目的

ダイ族の住居・集落についての最初の本格的な調査は、1980年に中国雲南省設計院によって行われ、調査結果は、1986年6月に出版された「雲南民居」にまとめら

\*<sup>1</sup> 大阪市立大学生生活科学部 教授

\*<sup>2</sup> 大阪市立大学生生活科学部 助手

\*<sup>5</sup> 万建築計画室 所長

\*<sup>3</sup> 神戸松蔭女子学院短期大学 講師

\*<sup>6</sup> 大阪市立大学生生活科学部 助教授

\*<sup>4</sup> 無有建築工房 所長

れている。筆者らが初めてシーサンパンナを訪れ、ダイ族の住居・集落を調査したのは、「雲南民居」が出版される前の1986年1月である。ダイ族の住居・集落を初めて見た時の筆者らの印象は鮮烈であった。その住居の形態、集落の景観は、ダイ族が日本民族の源流かと思わせるほど、日本のかつての農村景観とよく似ていたからである（図2-1）。

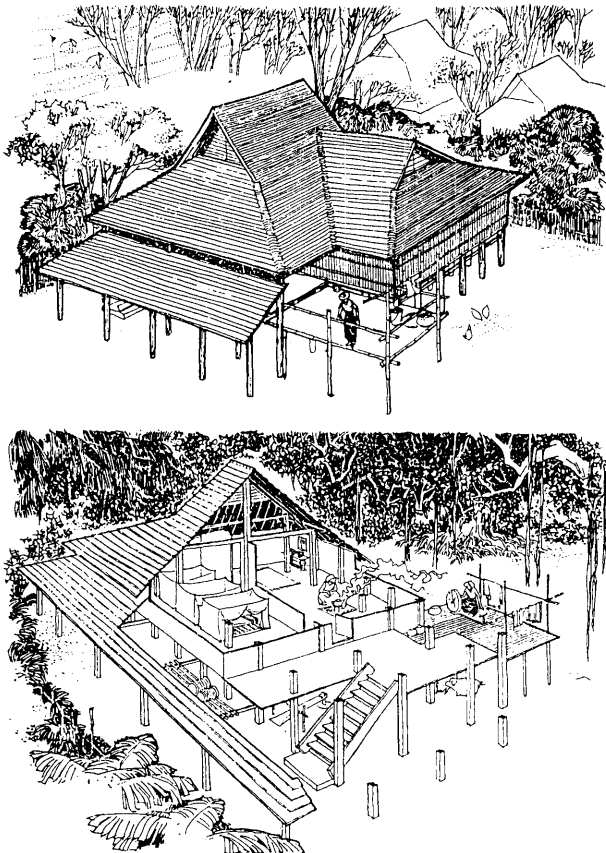


図2-1 ダイ族住居の概要（「雲南民居」より）

だが、この時点でも住居形態が近代化された事例が散見され、伝統的住居・集落を変容させる大きな力が働いている、という印象を受けた。

アジアの少数民族の住居は、程度の差はあれ、生産と生活の近代化の影響を受けて変容しつつある。その近代化は、一般に、近代化がより進んだ民族との、文化接触によってもたらされている。ダイ族の場合であれば、近代化は漢族化の側面を合わせ持つ。

ダイ族住居は、漢族から「竹楼」と呼ばれたように、かつては竹を住宅材料にしていた。解放後、それが「木楼」に代わった。「竹楼」から「木楼」への変化は、住宅規模の増大を伴ったが、住居の空間構成は基本的に同じで、生活構造も大きく変わらなかったものと考えられる。つまり、住宅材料が竹から木に代わっただけで、生活に新たな矛盾が発生するということはなかった、と考えられる。ところが、今日では、柱と壁は煉瓦に代わりつつあり、竹の垣根は煉瓦塀に代わってきている。「木

楼」はいわば「煉瓦楼」に代わりつつあるのである。煉瓦壁は隙間の多い板壁に比べて明らかに通気が悪く、高床の1階部分を煉瓦壁で囲ったものや、高床をやめて平地住居にしたものが見られるが、これらは亜熱帯気候のもとでは適さない。煉瓦塀を軒先まで積み上げる例も多く見られるが、これも通風条件を悪化させている。このような一見して矛盾を持っていると見られる例が、近代化、漢族化の過程で数多く出現しているのである。

生活が便利になり、快適になるのは、必然的な発展の方向である。一般に、近代化は、そうしたプラス面をもたらすと同時に、伝統的住居の持つ優れた面を否定し、それによって新たな矛盾を生み出す。したがって、伝統的住居の優れた面を活かしながら、住要求の発展に対応した矛盾のない住居のあり方をどう描くかが、現代の住居計画、住宅設計上の課題になる。伝統的住居を「第一の住居」、近代化された住居を「第二の住居」とすれば、現代では「第三の住居」のあり方が求められているのである。そのためには、伝統的住居のあり方と近代化された住居の矛盾が、正しく認識されていなければならない。

そこで、本研究では、以下の点について明らかにしようとした。すなわち、その第一は、ダイ族住居の伝統的な住空間構造を明らかにすることである。第二は、近代化・漢族化されたダイ族住居で、伝統的住空間構造がどのように変容、ないし、継承されているかを明らかにすることである。

### 3. 研究の方法

本研究では、住宅及び敷地の各部または全体を指す呼称とその意味、しつらえ・意匠の呼称とその意味、ウチ・ソト等空間序列を表す呼称とその意味を住居語意と定義する。調査は、日本語→漢語→ダイ語→漢語→日本語の二重通訳によって行った。そのため、語意の把握が十分にできなかったり、ダイ語の発音のカタカナ表記が、必ずしも適切でない部分を含んでいる。

研究の進め方としては、住居の各部について住居語意と住まい方・使われ方を把握し、次いで各空間構成要素間の空間序列について考察し、それらを総括して、ダイ族住居の住空間構造を説明する、という方法をとっている。

### 4. 調査概要

調査対象とした集落は、曼海（マンハイ）、曼竜代（マンロンタイ）、曼听（マンティン）、曼景蘭（マンチンラン）の4集落である。「マン」は「村」の意味である。

曼海と曼竜代は、景洪市（西双版纳ダイ族自治州の州都）の中心部に位置する版纳賓館から、南東へそれぞれ約39km、32kmのところに位置し、共に伝統的な「木楼」が比較的良好に継承されている集落である。

曼听と曼景蘭は、版納賓館から南へ4 km前後のところ  
に位置し、市街地に取り込まれた集落で、近代化・漢族  
化が進んでいる集落である。「木楼」も散見されるが、  
住居の柱は大半が煉瓦柱で、RC造住宅も出現している。  
また、住居の1階や敷地内には、景洪市に出稼ぎに来て  
いる漢族が入居する、低質な貸し部屋が沢山作られてい  
る場合が多い。

調査内容は、敷地平面図、住宅平面図及び屋根伏図を  
採集する。その図面をもとに、居住者、村長及びカナン  
(仏爺、かつて高僧で還俗した人、学識経験者)に、住  
居の各部について、住居語意と住まい方・使われ方の聞  
き取り調査を行う、というものである。

調査は、1993年9月、1994年12月～1995年1月、1997  
年1月の3回にわたって実施した。

調査対象住居は、曼海9戸、曼竜代13戸、曼听6戸、  
曼景蘭3戸、計31戸である。

### 5. 伝統的住居の空間構成要素とその意味

曼海・曼竜代では、図5-1の左図、及び右図の間取り  
になっている住居が一般的である。曼海・曼竜代では22  
戸の住宅平面図を採集したが、そのうち18戸が図5-1の  
事例に類するものであった。

そこで、以下、図5-1の事例に基づいて、伝統的住居

の空間構成要素とその意味について説明する。

なお、各空間構成要素の呼称については、居住者によ  
って呼称が異なっていたり、呼称を答えられない場合も  
あった。その場合は、村長及びカナンが発する呼称を採  
用した。

#### 5.1 宅地

宅地はロン・ヘン・ソンまたはロン・ホーム・ヘン（ま  
たは単にホーム・ヘン）と言う。ロンは「囲った」、ヘン  
は「家、部屋」、ソンは「野菜の生えた土地」という意  
味である。したがって、ロン・ヘン・ソンは「囲われた  
菜園付きの住宅敷地」という意味になる。また、ホーム  
は「囲われたところ」という意味で、ロン・ホーム・ヘン  
は「家を囲ったところ」という意味になる。

しかし、曼海では現在は敷地内に菜園は無い。かつて  
菜園であったところは竹垣で囲われ、牛・豚から野菜を  
保護した名残が見られる。現在、竹垣で囲われた中は  
樹木が植えられている。曼竜代では、敷地が広いので、  
宅地に続いてナス、サトウキビ等の菜園（ソンパツ、ソ  
ンは「土地」、パツは「野菜」という意味）を持つ例が  
多く見られた。

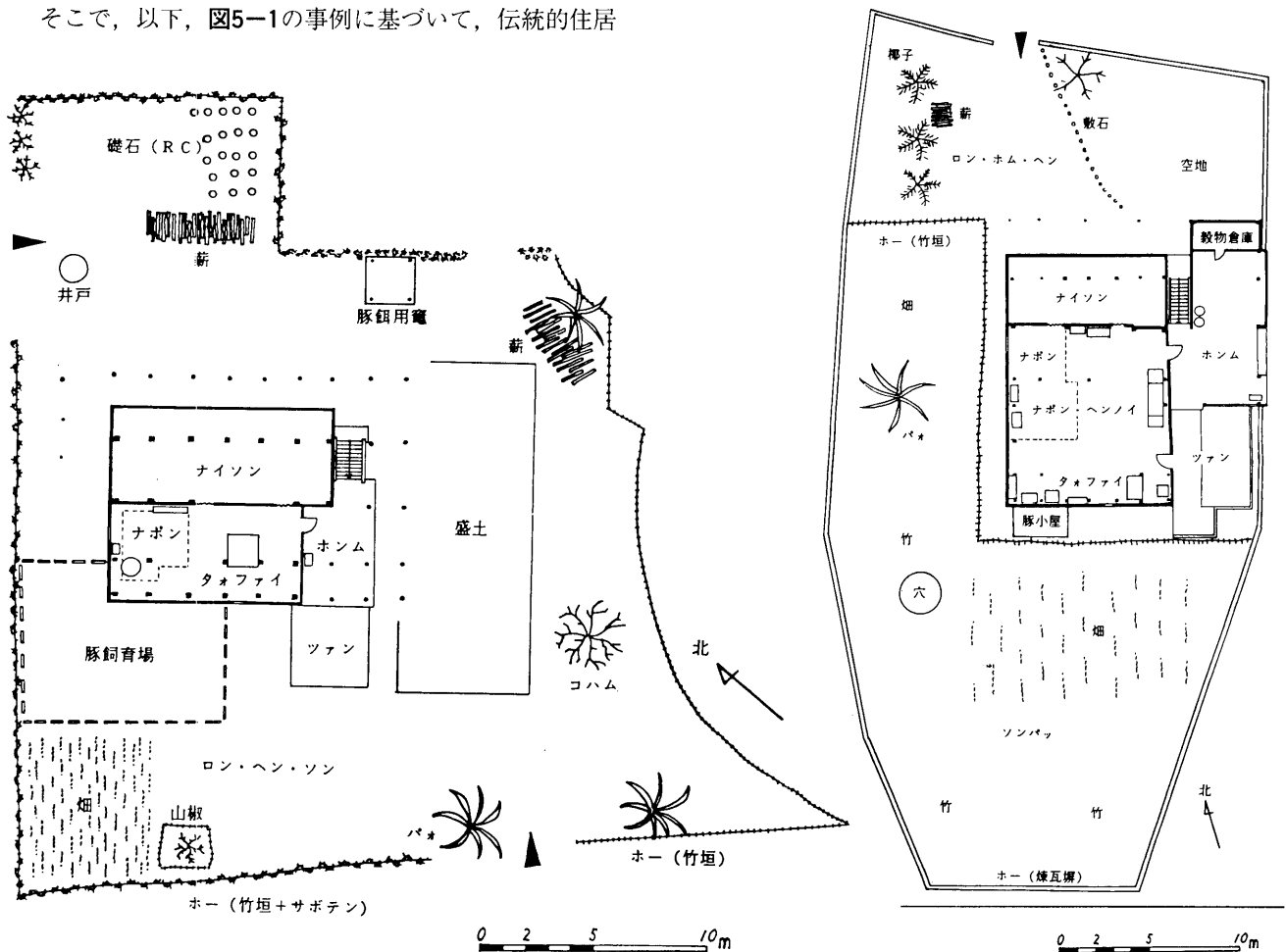


図5-1 曼海・曼竜代の一般的な住居配置

宅地は、竹の垣根、サボテンで囲われ、その囲いをホーと言う。ホーは近年煉瓦塀に代わってきている。曼海より曼竜代の方が煉瓦塀に代わったものが多い。

宅地の入口には門がある。門はパットゥと呼ばれ、パットゥは「半分」、トゥは「門」の意味であるが、語意は十分に把握できていない。門には、①2本の木の門柱に穴をあけて4～5本の竹を横に渡したもの、②竹で編んだドア状のもの、が見られる。①が原形ではないかと思われる。②は最近鉄扉に代わったものが若干見られる。門が閉まっている場合は宅地内に入ってはならないとされている。

## 5.2 1階外部空間

住居は高床で、主要な生活床面は2階にある。

1階（外部）と2階は階段でつながる。階段はヘンライと言う。ヘンは「上がる」、ライは「下がる」という意味である。

階段回りの軒下空間は、銀細工の工場になったり、糸紡ぎの場所となる場合があり、そのような場合は土間にベンチやいくつかの小さいすが置かれる。

2階の床下は、豚小屋、鶏小屋、家を建て替える時のための、材料置き場、薪置き場、トラクター置き場、などさまざまに使われる。また、ほとんど物が置かれずに、オープンなピロティ空間になっている場合もある。

## 5.3 2階室外空間

階段を上がったところはホンムと呼ばれる。ホンムは1音節の言葉であり、語意は把握できていない。ホンムは、屋根付きの板敷空間であるが、板壁で囲われていなかったり、一部しか板壁で囲われていない半戸外空間である。家によっては、階段を上がったところにドアを設ける場合がある。このドアは宅地入口の門と同じ言葉でパットゥと呼ばれる。

ホンムは、室内へ入るための玄関ホールとしての機能を持っている。そのため、「雲南民居」などでは「前廊」と表現している。しかし、ホンムは玄関ホールの機能だけでなく、多様な機能を持っている。ホンムは、糸を紡いだり、穀物を選り分けたりする作業空間として使われたり、日常的な接客空間として使われたりする。また、ホンムの隅にはカゴ、ザルなどの作業用具が置かれ、着替え用の衣類が吊されたり、軒下には歯ブラシが置かれたりしている。また、家によってはホンムの隅を板壁で囲み米の倉庫にしている。

階段を上がって進行方向に、ホンムに続いてツァンがある。ホンムとツァンの間には仕切りが無い。ツァンは「雲南民居」などで「晒台」と表現されているように、屋根の無いバルコニー、露台である。しかし、ツァンは、「竹で作ったもの」という意味で、これまでの伝統的な

露台が、割竹を敷いて作ったものであることを示している。ツァンは近年RC造に代わりつつあるが、RC造になってもツァンという呼び方は変わらない。

ツァンは水を使う場所で、炊事の下ごしらえ、食器洗い、洗面、歯磨き、水浴などが行われる。排水設備は無く、ツァンの下の地面に浸透させる方式である。そのため、ツァンの下の地面は排水でぐしゃぐしゃになっており、排水が道路に流れ出ている場合もある。

ツァンのもう一つの機能は、モミなど穀物の乾燥場所として使うことである。水を使うだけなら比較的狭いスペースでもよいが、穀物を広げるためには広いスペースが必要になる。ツァンの広さは、穀物の乾燥場所としての機能が規定要因になっていると考えられる。

また、ツァンは、洗濯物の干し場、布団の干し場としても使われる。

ホンムとツァンは室外であると認識されている。室内では裸足になるが、ホンムとツァンは靴、サンダルの使用が許される、というのが一般的なようである。一般的と言うのは「多くの場合」という意味であるが、統計的に数値で確認しているわけではない。家によっては、階段の下で裸足になる場合もあれば、階段を上がったところで裸足になる場合もある。逆に、室内の広間へ土足で入る場合もある。しかし、その場合でも寝室へ入る時は裸足になる。

階段を上がったところの垂れ壁の外側やホンムから、室内に入るドアの上部垂れ壁の外側に、タリヨウと呼ばれるしめ縄に似たようなものが飾られる。タリヨウは1音節の言葉であり、語意は把握できていない。タリヨウはダイ歴正月の水掛け祭りの際に、寺からもらってくる魔除である。これを飾ったところから奥は悪霊が入らないように、という意味であるから、そこが内外の一つの結界になっているものと考えられる。

## 5.4 2階室内空間

室内へはホンムから板のドアを開けて入る。入ったところに広間がある。広間は近年拡大される傾向にある。広間が大きくなると、ツァンに面してもう一つのドアが設けられる。広間が小さくホンムからのドアしかないものが、原初的なタイプであると考えられる。ドアはパットゥと呼ばれ、広間が大きくて2つのドアを持つ場合は、ホンムのドアがパットゥ・ロン、ツァンのドアがパットゥ・ノイと呼ばれる。ロンは「大」、ノイは「小」の意味である。しかし、パットゥ・ロンが大きなドアで、パットゥ・ノイが小さなドア、ということではない。ドアの大きさはほぼ同じである。機能からみると、パットゥ・ロンは玄関口、パットゥ・ノイは勝手口であるので、ロンの「大」は「正」、ノイの「小」は「副」を意味するものと考えられる。

室内は広間と寝室からなる。寝室は階段を下りる方向へ向けて、概略北に面して細長くとられる。

広間と寝室の境は、高さ2m前後の板の目隠し壁が立てられ、上部は空いている。目隠し壁はファーソンと呼ばれる。ファーは「囲う」、ソンは「寝ている」という意味である。つまり、ファーソンは「寝室を囲うもの」という意味になる。目隠し壁は近年、化粧をほどこした間仕切り収納家具に代わりつつある。その場合も、間仕切り収納家具の上部は空いている。上部が空いているのは、通気を確保するためだと考えられる。

寝室はナイソンと呼ばれる。ナイは「中、内」、ソンは「寝ている」という意味で、ナイソンは「中で寝ている」という意味になる。

それに対して、広間はノッソンと呼ばれる。ノッは「外」の意味で、ノッソンは「寝室の外」という意味になる。

すなわち、ファーソンを境にするウチ・ソトの空間領域概念が存在する。

#### 5.4.1 寝室

寝室（ナイソン）へは広間から入る。広間から寝室への入口は2つあり、入口は布のカーテンで目隠しされている。目隠しの布のカーテンは、パークンと呼ばれる。パーは「布」、カンは「見えない」という意味である。目隠しの板壁が間仕切り収納家具に代わっている場合は、2つのドアから寝室へ入る。すなわち、布のカーテンが板戸に変わる。そのドアはトゥソンと呼ばれる。トゥは「ドア」、ソンは「寝ている」という意味である。

ホンム側と広間側から見て、寝室の一番奥の隅に家の神がいるとされている。家の神はティウラ・ヘンと呼ばれる。ティウラは「神」、ヘンは「家・部屋」の意味である。家の神はピー・ヘンとも言う。ピーは神霊の意味である。寝室内の隅の柱とその手前の柱の間上部に板を渡し、その上にティウラ・ヘンがいるとされている。その板は、日本の神棚にあたるものと考えられるが、板には名前が付いていない。板の上には一般的には何も置かれていないが、家によっては、竹で編んだ小テーブルを置き、その上にローソク2本と花2つを置いてティウラ・ヘンを祀っている場合もある。ティウラ・ヘンが家を守る範囲は、竹の垣根または煉瓦塀で囲われた宅地の範囲内である。

寝室は1室空間であるが、内部には空間序列がある。すなわち、ティウラ・ヘンのいる奥の部分が上位空間とされ、年長者が寝る場所となる。若夫婦や子供達は、ホンムから入って手前のところ、すなわち階段側で寝る。しかし、寝室内を区分する空間呼称はない。

寝方は2～4つの蚊帳を吊り、世代ごとに別れて布団を敷いて寝る。家族は3世代が一般的であり、子供が小さい時は、老夫婦の蚊帳と若夫婦・子供の蚊帳の2つが

吊られる。子供が大きくなると、1人で寝るための蚊帳が吊られる。主人の弟などが同居する場合も時にはあるが、その場合も一人用の蚊帳が吊られる。

寝る時は、広間の方へ足を向け、頭は寝室の外壁の方向へ向ける。寝室内の7本の柱から外壁までの空間は、ドンホーないしバイホーと呼ばれる。ドン及びバイは「上」、ホーは「頭」で、ドンホーないしバイホーは「頭の上」という意味になる。ここは衣類の収納家具などの物置空間として使われている。

寝室の中は家族以外は入れない。家族以外が入るとティウラ・ヘンが怒るとされている。

寝室の外壁（かつては竹、現在は板）は無窓である。寝室は北側に面しているため、暑い陽射しを遮る必要が無いにもかかわらず、なぜか無窓である。無窓であることはティウラ・ヘンの存在と関係があると思われたため、繰り返し聞き取り調査で質問を行ったが、明確なことは確認できていない。

床は細かい割竹を敷き詰めて仕上げている。広間もかつては同じ仕上げであったが、近年は板敷に代わってきている。寝室の床仕上げがかつてと同じ割竹なのは、広間よりも通気が必要とされるためと考えられる。

#### 5.4.2 広間

広間（ノッソン）には各部の空間名称がある。

ホンムから入って一番奥の寝室に接している部分が、竹で編んだアンペラを敷いた、ナボンと呼ばれるところである。ナは「通じている」、ボンは「顔、窓」の意味である。ホンムから広間に入ると、ホンムのドアの向かい側に小窓が見える。その小窓がボンである。したがって、ナボンはこの小窓で「外と通じている場所」という意味であると考えられる。ナイソンのような生活行為を示す言葉ではなく、空間の組み立て方を示す言葉である。

ナボンは、長老等上客を迎え入れる場所である。座り方は、ボン（小窓）を背に最上客を座らせ、主人は寝室を背にする。また、ナボンは親戚など泊まり客の寝る場所にもなる。

広間が大きくなると、ナボンに続いてナボン・ヘンノイと呼ばれる空間がとられる。ヘンは「部屋」、ノイは「小、転じて副」の意味で、ナボン・ヘンノイは「小ナボン」ないし「副ナボン」という意味であると考えられる。ナボン・ヘンノイにも小窓があり、その小窓はボン・ノイと呼ばれ、それに対してナボンの小窓はボン・ロンと呼ばれる。ノイは「小」、ロンは「大」である。しかし、2つの窓の大きさは同じである。すなわち、「大小」は「大」が「上位、正」、「小」が「下位、副」を意味する概念で、空間序列を表す呼称であると考えられる。

広間が小さくナボン・ヘンノイが無い場合は、ナボンにテレビが置かれ、ナボンが家族の居間を兼ねることに

なる。しかし、ナボン・ヘンノイがとられる場合は、そこにテレビが置かれ、居間空間が分化する。すなわち、ナボンは接客空間、泊まり客の寝る空間として専用化する。テレビはホンムから入った向かいの奥の壁際に置かれる。すなわち、ホンム側を背にしてテレビを見る。

広間の中で、空間名称が付いているもう一つの場所は、タォファイまたはヘンファイと呼ばれる場所である。タォは「界」、ファイは「火」、ヘンは「部屋」という意味である。したがって、タォファイは「火の回り」、ヘンファイは「火の部屋、厨房」という意味になる。

タォファイの中心は木製のイロリである。イロリは煉瓦のカマドに代わりつつあり、作業姿勢はしゃがむ姿勢から立つ姿勢に代わりつつある。

イロリないしカマドは、ツァン（露台）の近くで、ティウラ・ヘンの位置するところから最も遠い対角線上の隅に位置している。

日常の食事空間は、タォファイとナボン（広間が大きい場合はナボン・ヘンノイ）の間のわずかな空間で、食事空間の呼称は無い。

## 5.5 柱と梁

サオファン、サオナンと呼ばれる一対の柱が最も重要な柱とされている。サオは「柱」、ファンは「男」、ナンは「女」を意味し、サオファンは「男柱」、サオナンは「女柱」である。サオファン（男柱）は階段際の柱から数えて4番目の柱で寝室内に位置する。サオナン（女柱）は広間の中のイロリの辺りに位置する。二つの柱は通り芯上に位置し、構造上重要な柱になっている。二つの柱の間には序列は無い。また、二つの柱には宗教上の意味や禁忌は存在しない。

サオランと呼ばれる柱が2番目に重要な柱とされている。ランは「重要」という意味である。サオランは2本あり、共に寝室と広間の間の境界線上に位置する。ホンムから入ってすぐの柱がサオラン・ノツ、奥の柱がサオラン・ナイと呼ばれる。ノツは「外」、ナイは「内、中」という意味である。

サオラン・ナイの方が重要で、葬式の時に、サオラン・ナイに死者を寄りかからせて死体を洗い、新しい衣服を着せ、足を広間側に向けて1日中死者を寄りかからせておく柱である。したがって、生きている者がこの柱に寄りかかることは禁忌とされている。一方、サオラン・ノツは特別な意味を持っていない。サオラン・ナイに対する対の柱としての意味があるだけである。

しかし、サオランは必ずしも柱ではなく、柱の代わりに厚板を立てている場合も少なくない。また、サオランの位置が認識できていない居住者も少なくない。重要な柱とされている割には奇妙なことであるが、この点についてはなぜそうなのか解明できていない。

3番目以降の柱については分からなくなっている。ティウラの名前や柱の意味などを伝える歌を歌う歌手が、1800年代までいたようであるが、現在は歌も継承されていない。

柱と梁の仕口には所どころに赤い布が挟み込まれている。この布はイェンパイサオナツと言われるものである。イェンは「赤」、パイは「上の部分」、サオは「柱」、ナツは「竜、神の代表」を意味する。この布は家内安全を祈願するものであるが、ここに神が宿っているわけではない。

また、どの梁にも神は宿っていない。

## 5.6 屋根

かつて屋根は茅葺であり、屋根の形状は一つの入母屋に下屋を回すという単純なものであった。茅は焼き畑で生産された。焼き畑がゴム園に代わるのに対応して、屋根材は素焼瓦（引っ掛け棧瓦）に代わっていった。今日では、下屋にだけ茅を使用する例も若干見られるが、ほとんどが下屋も瓦葺である。瓦の導入と同時にトタンが入り込み、屋根の谷部分の雨仕舞の処理が可能になった。また、住宅規模も拡大した。そのため、今日では、寝室及び広間の室内部分を母屋として、一番大きな入母屋屋根を掛け、トタンの谷樋を使って、それにいくつかの屋根をさしかけるという複雑な形態になっている。図5-2は比較的単純な屋根伏の事例である。

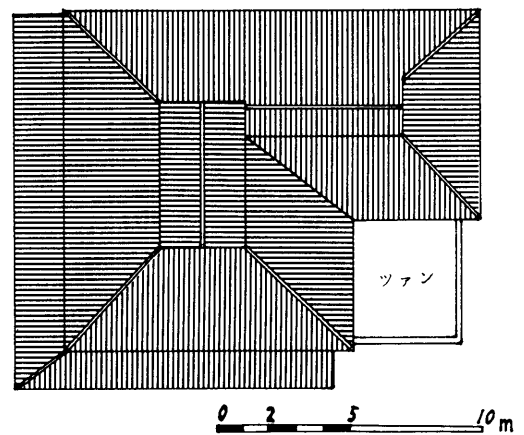


図5-2 屋根伏の事例

母屋の棟の中央と両端には棟飾りが付いている。その他の屋根には付いたり付かなかったりしている。中央の棟飾りはクァンエンまたはガンファンと呼ばれる。クァンは「巢」、エンは「燕」を意味し、クァンエンは「燕の巢」の形状に似ていることから付けられた呼称である。ガンは「真ん中」、ファンは「半分」を意味し、ガンファンは中央の棟飾りの位置を意味する呼称である。両端の棟飾りの呼称は無い。これらの棟飾りは、寺の仏と家の守り神（ティウラ・ヘン）を敬うために付けられる。

曼竜代では、屋根瓦数枚分を板ガラスにしたトップライトが、広間の屋根裏数か所に設けられている例が散見された。広間は昼間でも薄暗いのが一般的であるが、トップライトによってかなり明るくなっている。しかし、広間にトップライトを設けることはあっても、寝室にトップライトを設けることはしない。寝室は昼間でも真っ暗に近い。

## 5.7 便所

便所はホンヒーと呼ばれる。ホンは「穴」、ヒーは「糞」を意味する。しかし、伝統的住居には便所が無い。曼竜代で菜園の中に穴を掘っただけの便所を発見するのが唯一である。排泄は草むら、川などで行われ、糞は豚、鶏、魚が跡形も無く処分する。しかし、寺には便所がある。僧が排泄行為を一般の人びとに見られるのはよくないからだとされている。そのことからすると、近代化が進むと、曼海や曼竜代でも、他集落ですでに出現している共同便所の段階を経て、将来各戸に便所が作られる可能性があるかもしれない。

## 6. 伝統的住居の空間構造

### 6.1 ウチ・ソトの空間概念

ダイ族の伝統的住居の空間構造を説明する空間概念の第一は、ウチ・ソトの領域区分である。ウチ（内）はダイ語でナイと言ひ、ソト（外）はダイ語でノツと言ひ。ウチ・ソトの空間概念は、敷地の内外から寝室の内外までの段階的領域構成を意味するものである（図6-1）。

敷地は竹の垣根、サボテン、煉瓦塀などで囲われ、門を持つ。その囲い・門の内外が第一のウチ・ソトの領域

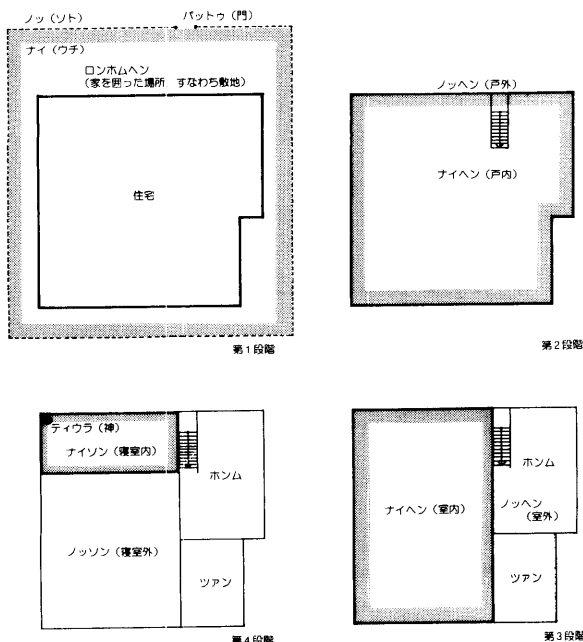


図6-1 ウチ・ソトの段階的領域構成

区分である。

第二のウチ・ソトの領域区分は階段の入口のところにある。階段の入口の外がノツ・ヘン（ヘンは「家、部屋」の意味。ここでは、「家」の訳が適当であると考え、ノツ・ヘンを「戸外と訳す）であり、階段から始まる住宅内がナイ・ヘン（戸内）である。

階段を上がったところがホンム、ホンムの先がツァンで、階段・ホンム・ツァンの軸線に直交してホンムから広間に入る。寝室へは広間から入る。階段・ホンム・ツァンの空間と広間・寝室は板壁で仕切られ、出入口は板戸である。その板壁・板戸の内外が、ウチ・ソトの第三の領域区分になっている。すなわち、階段・ホンム・ツァンの空間はノツ・ヘン（ヘンは「部屋」の訳が適当であると考え、ノツ・ヘンを「室外」と訳す）と言ひ、広間・寝室の空間はナイ・ヘン（室内）と言ひ。

室内はファーソン（すなわち、「寝室の囲い」）で寝室と広間に二分されている。ファーソンには2つの入口がある。このファーソンの内外がウチ・ソトの第四の領域区分になっている。すなわち、寝室はナイソン（ナイは中、ソンは「寝ている」の意味）と呼ばれるのに対して、寝室のソト（ダイ語でノツ）の広間はノッソンと呼ばれる。

以上のように、ダイ族の伝統的住居には、4段階のウチ・ソトの段階的領域構成がある。寝室には家の神が祀られていることから、最もウチなる空間領域である、と考えられる。

### 6.2 カミテ・シモテの空間概念

ダイ族の伝統的住居の空間構造を説明する空間概念の第二は、カミテ・シモテの空間軸である。カミテ（上手）はダイ語でパイヌー（パイは「方向」、ヌーは「上、前」の意味）と言ひ、シモテ（下手）はダイ語でパイタイ（タイは「下、後」の意味）と言ひ。

ダイ族の伝統的住居には、カミテ・シモテの空間軸が2つある（図6-2）。

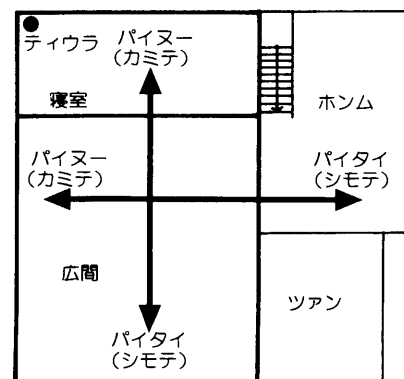


図6-2 カミテ・シモテの空間軸

第一の空間軸は、寝室側をカミテ、広間側をシモテとする軸線である。この軸線は、ナイソン（寝室）・ノッソン（広間）のウチ・ソトの領域区分に、規定されたものである。この軸線は、階段・ホンム・ツァンを貫く軸線でもあるが、階段側がカミテでツァン側がシモテになっている。階段上り口からツァンへ向かう進行方向から見れば、階段側がシモテ、ツァン側がカミテとなるところであるが、寝室と広間の位置関係に規定されて、カミ・シモが逆になっている。すなわち、カミテ・シモテの空間軸は進行方向とは無関係である。

第二の空間軸は、第一の空間軸に直交する軸線である。すなわち、寝室・広間側をカミテ、階段・ホンム・ツァン側をシモテとする空間軸である。ホンムから広間に入るの、手前がシモテ、進行方向がカミテであると考えられないこともないが、前述のように、進行方向とは関係ないと思われる。室内・室外のウチ・ソトの領域区分が、カミテ・シモテを規定していると考えられるからである。

第一の空間軸の最もカミテ、第二の空間軸の最もカミテに家の神が祀られる。すなわち、ここが住居内の最上位空間である。

## 7. 伝統的住居の住居内多人数集會と広間の規模拡大

伝統的住居では、住居内で行われる多人数集會が実数が多い。まず通過儀礼についてである。生後1ヶ月めの子供の誕生祝いには、親戚が全部来てその他の家は1戸に1人がやって来る。曼海では約200人が入れ替わりやって来る。男の子供が寺に入って僧になる日、結婚式、新築祝い（概略10年に1回住宅を建て替える）の場合はもっと盛大で、曼海では約400人が入れ替わりやって来る。葬式の時は、曼海の場合村長とカナンが相談して決めた32人が、曼竜代の場合は1戸1人が死者の霊を守る人として寝泊まりする。また、年中行事である開門節、開門節には親戚全部が集まる（旧正月の水掛け祭の時には人が集まることはない）。3世代同居が一般的であり、親夫婦世代の兄弟が平均8人、子夫婦世代の兄弟が平均5人であるから、親戚の数は平均13戸になる。1戸から3～4人やって来るとすれば、50人前後の集まりになる。また、田植え、稲刈りは親戚及び近隣の結いで1日の作業として行われており、作業日の昼食時に40人前後が家に集まる。水稻は二期作であり、水田は2～3か所に別れている場合が多いので、稲作の結いの集まりだけで年に8～12回の多人数集會が住居で行われている。

これらの多人数集會では食事、酒、タバコが振る舞われる。その場所としては広間が使われるが、広間は超満員となる場合が多く、広間から溢れた人はホンムも飲食の場として使う。結婚式や葬式の時は、寝室と広間の間の間仕切りを取り払って、一体的な大空間として使う場

合もある。また、広間のタオフィアだけでは調理が間に合わない時は、豚餌用のカマドを使ったり、地面に臨時のカマドを設ける。

近年、図5-1の左図の住居のタイプは右図のタイプに建て替えられる傾向があり、住宅の規模拡大が進んでいる。住宅規模が拡大しても、寝室の規模はほぼ一定で、広間の規模拡大が著しい。広間の規模拡大の基底には、上述したような多人数集會に対応しようとする住要求があるからだと思われる。また、広間が規模拡大しても間仕切りなどで分割される例が少ないのも、多人数集會が頻繁に行われているためであると考えられる。

## 8. 近代化・漢族化の様相

曼听と曼景蘭のダイ族住居は近代化・漢族化され変容している。変容の様相は以下の通りである。

### 8.1 住居の構造と空間構成

図8-1は伝統的住居の空間構成を継承している「木楼」の事例である。曼听・曼景蘭ではこのような伝統的「木楼」は少なくなっている。大半は伝統的な空間構成を基本的に維持しながら柱が煉瓦柱に代わっている。また、伝統的な空間構成を基本的に維持しながら、柱・梁・2階スラブ・2階壁がRC造で、屋根は木造の伝統的な様式にしている例も散見される。

図8-2は伝統的な空間構成がやや崩れた「木楼」の事例である。1階には、景洪市に出稼ぎに来ている漢族が入居する、低質な貸し部屋が作られている。曼听・曼景蘭では、住居の1階や敷地内に、このような貸し部屋が作られている場合が多い。

図8-3は伝統的な空間構成が完全に消滅した事例である。RC造で屋根はフラットルーフ、各室は壁で分離され、最近の漢族の住居に似ている。しかし、接客室（ダイ語でティーハッヒヤ）は漢族住居には見られない広さであ

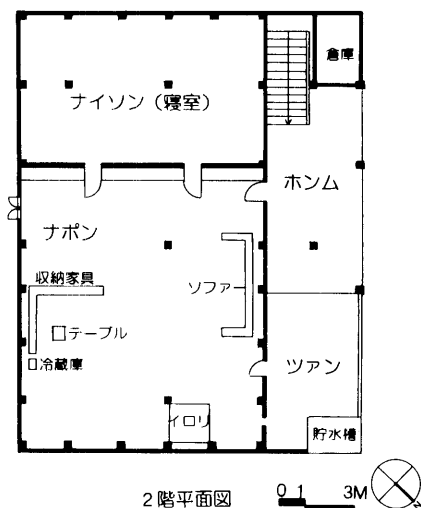


図8-1 近代化・漢族化した集落の「木楼」の事例（曼听）



る。使い方を尋ねたところ、祭日や結婚式で100人の宴会が行われる、このことである。したがって、この応接間は伝統的住居の広間を継承していると言えなくもない。

## 8.2 寝室

曼听・曼景蘭では、広間と寝室の間の間仕切りが収納家具になっている住戸が多い。これは曼海・曼竜代でも散見されたが、曼听・曼景蘭に比べると少ない。

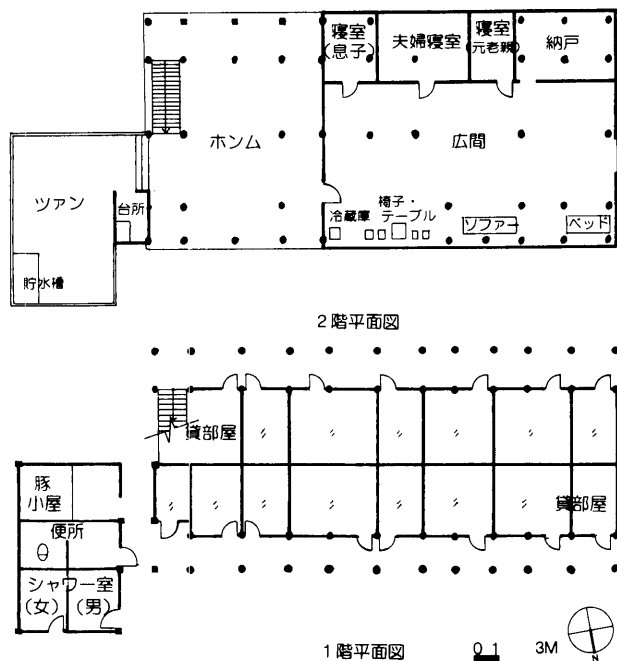


図8-2 伝統的住空間構造がやや崩れた「木楼」の事例（曼景蘭）

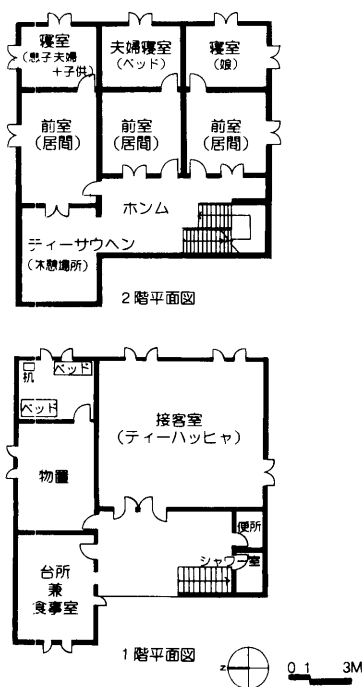


図8-3 伝統的住空間構造が消滅したRC造住宅の事例（曼景蘭）

伝統的住居では、間仕切りの上部が途中までで、寝室の上部空間と広間の上部空間がつながっているが、曼听・曼景蘭では、間仕切りが天井まで伸びて、1室空間の寝室が広間と完全に分離されている例が見られた。また、図8-2の事例のように、寝室が木造壁で仕切られている例が見られた。図8-3では寝室がRCの壁で完全に分離されている。これらは、寝室のプライバシーに関する近代化が進んだ事例であると考えられる。

また、図8-2、図8-3では、寝室にベッドが導入されており、漢族化が進みつつあるということが分かる。

## 8.3 台所

曼听・曼景蘭では、ほとんどの住居にプロパンのガスレンジが導入されている。イロリを併用している住居も多いが、イロリが消滅した住居も少なくない。

図8-2は台所が広間から分離している事例である。また、図8-3では台所兼食事室が独立している。曼海ではこのような事例は無く、曼竜代で2例発見されたが（図8-4）、この2例は、広間と台所間の壁が目隠し壁の高さのものであつて、完全に分離されたものではない。しかし、曼听・曼景蘭では、台所が完全に分離している事例が散見された。

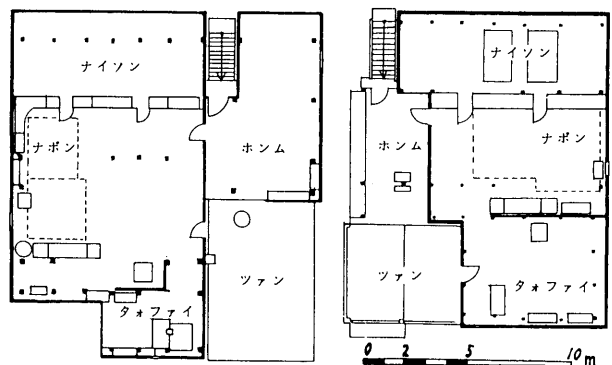


図8-4 台所（タオファイ）が分離している事例（曼竜代）

## 8.4 上下水道

曼听・曼景蘭では上水道が整備されており、住居にはツァンの一角に貯水槽が作られている。貯水槽の下部にシャワー室を持つ住戸が多い。これは伝統的住居には見られなかった現象である。

また、下水道が一部整備されており、水洗便所を持つ住居が散見される。下水道が来ていないところでは、住居に便所が無く、共同便所を利用している。

## 8.5 生活用具

曼听・曼景蘭では、ガスレンジ（プロパン）、冷蔵庫、洗濯機、電話、ソファ、衣装箱などが導入され、これらの生活用具の名称は漢語で呼ばれている。また、図8

—3の住居では太陽熱温水器を導入している。伝統的住居でも、生活の近代化・漢族化は進んでいるが、曼听・曼景蘭では一層近代化・漢族化が進んでいる。

## 8.6 敷地の囲い

伝統的住居でも散見されたが、曼听・曼景蘭では、敷地の囲いはすべて煉瓦塀で、入口は鉄扉である。

## 9. 家の神と伝統的住空間構造の継承

### 9.1 家の神の継承

曼听・曼景蘭では、家の神（ティウラ・ヘン）を祀ることが継承されている。生活の近代化・漢族化が進んでも、土着的宗教は容易に消滅しないものと考えられる。

数が少なくなった「木楼」では、伝統的住居と同様に寝室の奥の隅の上部に家の神を祀っている。但し、木板がある場合と無い場合がある。木板が無い場合はローソク3本を置いた皿を梁の上に置いたりする。伝統的住居の空間構成を維持しながら、柱が煉瓦柱に代わったり柱・梁・2階スラブ・2階壁がRC造に代わっている場合もあるが、その場合も、木板が無く、寝室の奥の隅の上部の壁に3本のローソクを蜜蝋で貼り付け、そこを神が宿る場所としている。

寝室が1室空間になっている場合が多く、寝方には長幼の序列がある。すなわち、家の神が祀られるカミテに「長」が寝、シモテに「幼」が寝る。しかし、**図8-2**や**図8-3**のように寝室が数室に分離されている場合は、長幼の序列に関係ない寝方になる。**図8-2**と**図8-3**では、寝室群の中央の部屋が夫婦寝室で、夫婦寝室へ入って右手の奥の隅の上部の壁に、3本のローソクを貼り付け、そこに家の神を祀っている。

伝統的住居と同様に、寝室へは家族以外は入れない。家の神が怒るため、と信じられているからである。**図8-2**や**図8-3**のように寝室が数室に分離されている場合は、夫婦寝室以外の寝室には、家族以外の者でも入れるが、家の神を祀っている夫婦寝室には、家族以外は入れない。**図8-3**の事例は近代化・漢族化が激しく進んだ事例であるが、家の神は継承されている。次の世代に継承されるかどうか分からないが、今のところは、生活や住居が近代化・漢族化されても、家の神は生き続けているのである。

### 9.2 伝統的住空間構造の継承

伝統的住居には、4段階のウチ・ソトの段階的領域構成があり、カミテ・シモテの空間軸が直交して2軸存在している。このような空間構造は、曼听・曼景蘭でも大多数の住居に継承されている。

しかし、**図8-2**の事例では、伝統的住空間構造がやや崩れている。伝統的住居では、第一の空間軸の最もカミ

テ、第二の空間軸の最もカミテに家の神が祀られているが、**図8-2**の事例はそうになっていない。

更に、**図8-3**の事例では、空間構成が完全に変容したものになっており、伝統的住空間構造は継承されていない。

## 10. 結語

本研究では、第一に、ダイ族住居の伝統的な住空間構造を明らかにし、第二に、近代化・漢族化されたダイ族住居で、伝統的住空間構造がどのように変容、ないし、継承されているかを明らかにしようとした。その結果、以下の知見を得た。

- 1) ダイ族の伝統的住空間構造は、ウチ・ソト、カミテ・シモテの2つの空間概念によって説明される。
- 2) 伝統的住居には、敷地の外から寝室内に至るまでの4段階のウチ・ソト領域構成が存在する。
- 3) 伝統的住居には、カミテ・シモテの空間軸が直交して2つ存在する。第一の空間軸の最もカミテ、第二の空間軸の最もカミテに家の神（ティウラ・ヘン）が祀られ、ここが住居内の最上位空間になっている。
- 4) 近代化・漢族化が進んだ集落でも、家の神を祀ることは継承されている。
- 5) 近代化・漢族化が進んだ集落でも、大多数の住戸に伝統的住空間構造が継承されている。しかし、伝統的住空間構造が崩れた事例や、伝統的住空間構造が完全に消滅した事例も散見される。